

らである。

それら二つの時期の宗教論を比較検討すれば、その基本的枠組は一貫していることがわかる。それは次のような点である。すなわち、ティリッヒの宗教論が、「無制約的なもの」や「究極的なもの」を中心に据えて、いわゆる「宗教的領域」に限定されない広い範囲に宗教的なものを見出そうとする点、個別的な宗教的表現を宗教的象徴として解釈するという点、さらにその宗教的象徴の「真理性」を「無制約的なもの」あるいは「究極的なもの」を真に表しているかどうかによって規定し、動的に捉える点である。

しかし、より細かく見るとそこにはティリッヒの視点の変化を見て取ることができる。それが、本質／現実の緊張関係という見方から、広義／狭義の二重性という宗教の理解へと展開している。この変化は、「究極的関心」という広義の宗教理解の範囲内においてではあるが、宗教の多元性を包括するような方向へと展開しており、広義においては「究極的関心」として広く宗教の意味を人間の実存に関わる問題として解釈し、狭義においては具体的で個別的な宗教を人間の実存的関心が表現された象徴として、それらの意味を再解釈しようという意図が確認できる。

こうした宗教論の変遷の問題は、ティリッヒの真理観の展開に収斂するように思われる。その真理観の展開に大きく関わるのがプラグマティズムにおける「真理」である。アメリカ亡命後のティリッヒは、究極的に関わることによって経験される実存的な「動的真理」、すなわち「実存的真理」という概念によ

って自身の宗教概念を根拠付けている。そうした真理観はプラグマティズムの動的真理という考え方と類似しており、ティリッヒ自身もその関連性を指摘している。そうした真理観が亡命後に宗教論に取り入れられ、それと対を為す形で「究極的関心」の概念が現れていることから、彼の思想とプラグマティズムの関わりは、今後さらなる検討を要する問題である。

テキスト科学とインド哲学研究の方法論について

三 浦 宏 文

インド哲学は、これまでインドの伝統的方法、文献学的研究、思想的な研究、哲学的研究といったいくつかの方法論によって研究されてきた。しかし、その方法論自体については一部を除いてあまり議論されてこなかった。日本においても、インド哲学の研究方法といえば、仏教学とともにサンスクリット語などの外国語文献を正確に読解して行くという「客観的文献学」のイメージが強く、その「客観的文献学」を下地としてどのような研究をするか、という意味での方法論はほとんど考えられてこなかった。

このような状況に対して、名古屋大学の和田壽弘を中心とする研究グループは、最近の著書で「テキスト科学」という新しい方法論を提案した（和田壽弘編『インド哲学における伝統と創造の相克——テキストとコンテキスト』統合テキスト科学の

第3部会

構築第七回国際研究集会報告書、名古屋大学大学院文学研究科、二〇〇六年及び Toshihiro Wada (ed.), *Indian Philosophy and Text Science*, Delhi: Motilal Banarsidass, 2009)。本稿ではこの「テキスト科学」という新しい方法論的提案を踏まえつつ、筆者自身の見解について論じて行きたい。

この「テキスト科学」という方法論は、コンテキストという概念に注目する。ここでいう「コンテキスト」という概念は、テキストの外部についての様々な情報である。もちろん、これまでもインド哲学においてコンテキストについての議論がなかったわけではない。しかし、和田によれば、その研究の多くが無意識的であつたので、それを意図的に駆使して方法論を組み立てたいとする。和田は「テキスト科学」の根本原理を「サンスクリットあるいは他の言語で書かれているテキストを理解するために、他の研究領域によって提供される情報のように、私たちがそれらの外側の要因として働くもの（＝コンテキスト）への注意をはらうこと」と規定している。ところで、この和田の研究グループの著書では、コンテキストの概念において対立する見解が出されている。歴史的背景をインドの哲学を理解する重要なコンテキストと見なすヨハネス・ブロンコルストの見解と、テキストの「史的側面」だけでなくテキストの「作品的側面」を重視し、その「作品的側面」を持つ「対話的テキスト」にコンテキストを見出す下田正弘の見解である。ブロンコルストは、インド哲学の学説や論点は、インドの歴史的社会的背景抜きに理解することは不可能であり、それを無視して西洋の哲学の議論と比較することを極度に危険視する。これに対し

て、下田は思想家のドミニク・ラカブラの「対話的テキスト」の議論を援用し、コンテキストとは現在との関係なしで閉じられている過去ではなく、対話的テキストである仏教聖典の中の「現在に影響する過去」を示す概念と考える。

筆者の立場は、下田の見解に近いものである。「テキスト」とは、記号論者のウンベルト・エーコがいうように単なる物質的存在ではなく意味作用の体系とコミュニケーションの過程との混合概念であり、一つの事態として存在しているものであると考えるからである。社会的歴史的背景というコンテキストは、そのコミュニケーションの過程に存在する一つの重要な要素ではあるが、それ以上の存在ではない。むしろ、このテキストに関するコミュニケーション（ラカブラのいう対話）的要素を無視し歴史的社会的背景の側面だけに研究者が縛られた場合、そのテキストは博物館に飾るべき遺品と化してしまう。逆にそのテキストが古典的な価値を持つものであればあるほど、そのコミュニケーション的要素により、新たな読みが生まれてくる。その新たな読みや解釈こそ、インド哲学研究の豊かな成果の源泉となり得るのである。

再考ブーバー「我―汝」思想

堀川 敏 寛

マルティン・ブーバーの「我―汝」思想は、ブーバー研究の第一人者であるアメリカの研究者モーリス・フリードマンとエ